編集後記

遅くなりましたが、第25巻2号をお届けします。巻頭言には2009年9月14日から18日までスペインのMallorcaで開催されますFlow Analysis XIの実行委員長であります Prof. Cerdaから歓迎のご挨拶をいただきました。1994年のFlow Analysis VIがスペインのToledoで開催されたことを思い出しますと2回目のスペイン開催となります。今回の会場はリゾート地域のようで、私にとっては大変魅力的に感じています。国内からの巻頭言としては山梨大学の川久保進先生に「オンサイト分析をFIAで」というタイトルでご寄稿いただきました。環境分析や臨床検査など現場でのオンサイトでの測定法が要望されていますので、川久保先生のご指摘のようなポンプレスの簡易な分析システムが今後出現するかもしれないと思いました。

指針欄には、東京薬科大学名誉教授の高村喜代子先生に寄稿いただきました。ご体調の悪いところ、ご無理をお願いして申し訳なく思っております。流れを用いることにより、アンペロメトリックな検出器が有効な検出器となることが、数多くの分析例を挙げて紹介されています。「流れを制する者、分析を制す」は少しオーバかもしれません。

都立大学名誉教授の山田正昭先生には、パーソナルレビューとして「新規化学発光系の探索」というタイトルで、これまで発見されてきた化学発光系の経緯が述べられています。私も山田先生の研究室を訪問させていただいたときに歴代の化学発光検出器を見せていただいとことを思い出しました。

研究論文の欄には、今回は国外から3報と国内から1報の論文が投稿されました。前号はInternational Symposium on Flow-Based Analysis VIIのプロシーディングとして企画しましたので多くの投稿論文がありましたが、今回はやや低調でした。来年は会員の皆様からのたくさんのご投稿をお待ちしております。

トピックス欄には私の研究室の大学院の学生さんに書いてもらいました。初めての試みでしたが、研究室のゼミで文献紹介をさせているものをコンパクトにまとめる訓練にもなり、よかったと思っています。会員の皆様の周辺でも声をかけていただき、たくさん投稿していただければ幸いです。

報告の欄には本年9月28日から10月3日にかけて本研究懇談会の委員長である愛知工業大学の酒井忠雄教授を実行委員長として開催されましたICFIA2008と本研究懇談会創立25周年記念会の報告記を、大阪府立大学の長岡勉先生とチェコのチャールズ大学のSolich先生にご執筆いただきました。読ませていただきますと3か月前の会議がほんの昨日のように思い出されます。大変盛大で心に残る会議でした。参加されて外国の研究者もいつまでも覚えていただける会議ではなかったかと思います。

国内の学会情報は、徳島大学の田中秀治先生に、FIA Bibliographyは岡山大学の高柳俊夫先生に引き続きお願いしております。Bibliographyは50回を重ね、収録された論文タイトルは10000報を超えてしまいました。

今後ともこの会誌が本会員の皆様方の情報交換の場になることを希望しております。ご寄稿をお待ちしております。

JFIA編集委員長

今任稔彦